

文化遺産を後世に伝えるためにーフランス国立古文書学院におけるコンセルヴァトゥール養成教育

国立公文書館 小原 由美子

1. はじめに

本年3月、筆者は「公文書等の中間段階における集中管理の仕組みに関する研究会」が行ったフランス視察に随行し、パリのフランス公文書館局 (Direction des archives de France、以下 DAF) を訪ねる機会を得た。視察の主たる目的であった中間書庫制度の調査結果については、牧原出同研究会委員 (東北大学法学部教授) が、「公文書等の適切な管理・保存及び利用に関する懇談会」第12回会合で報告されているので、配布資料及び議事要旨を参照されたい¹。この調査にあたって、DAFを通じてフランス国立古文書学院 (Ecole nationale des chartes、以下 ENC)² への訪問を打診したところ、折からの雇用問題をめぐる大規模な抗議運動の影響で学院訪問こそ叶わなかったものの、DAFの建物内でアニタ・ゲロー・ジャベール (Anita Guerreau-Jalabert) 院長等と直接お会いしてお話をお聞きすることができた。懇談会における報告は、中間書庫関係に的を絞って行われ、このENCに関する調査結果は含まれていないため、改めて本稿で面談の内容を報告したい。

当日は、予めこちらから送付した質問項目に沿って、ジャベール院長から主に説明していただき、ENC国際担当のガエル・ベケ (Gaëlle Bequet) 氏、ENC出身でDAF職員のクリスティン・マルティネズ (Christine Martinez) 氏から適宜補足していただいた。限られた時間の中で多くの有意義なお話をうかがうことができたのは、通訳をお願いしたビュテル延増崇子氏の的確な訳に負うところが多い。以下の記録は、当日説明していただいた内容を、項目ごとにまとめたものである。

2. 国立古文書学院調査記録

調査日時：平成18年3月31日 (金) 14:30-16:00

場 所：フランス公文書館局

¹ 「公文書等の適切な管理・保存及び利用に関する懇談会」第12回

<<http://www8.cao.go.jp/chosei/koubun/kondankai12/siry01.pdf>> (参照 2006-9-26)。なお、本調査報告は同懇談会の「中間段階における集中管理及び電子媒体による管理・移管・保存に関する報告書」(2006.6.22)の参考資料にも収録されている。

² ENCについては、拙稿「アーキビストの教育と専門職 - アメリカとフランスの事例」『アーカイブズ』第12号 (2003年7月) p.39-42 参照。

(1) ENC の概要

国立古文書学院は、国として公文書管理制度を導入しようという動きを受けて、19世紀半ばに設立された教育機関である。当初は、アーキビストと司書の区別がなく、図書と文書を扱う専門家両方の養成のために設けられた。

ENC はフランス独自の教育機関であるグランゼコール (Grandes Ecoles) の1つで、大学とは別の独立した高等専門教育機関である。他のグランゼコール同様、バカロレア (高等学校卒業資格) 取得後 2 - 3 年の準備学級に進み、非常に厳しい選抜試験に合格した者が入学する。入学後は公務員研修生の地位を与えられ、政府から給与を支給されながら学ぶ。現在の就学期間は 3 年半である。

最近 15 年ほどの間に、2 つの大きな制度的改革があった。1 つは学校の再編で、1990 年代初頭に行われた。ENC において純粋に科学的・学問的な教育を受けたのち、卒業生はさらに上級の 2 つの学校に進学する。1 つは国立文化遺産学院 (Institut national du patrimoine, 以下 INP)³で、文書館と博物館の専門職を目指す者が進学する。もう 1 つはリヨンにある国立高等情報科学図書館学院 (L'Ecole nationale supérieure des sciences de l'information et des bibliothèques, 以下 ENSSIB) で、図書館の専門職を養成する。これらの上級学校でさらに 18 ヶ月、ENC と同様給与の支給を受けながら勉強を続け、修了するとコンセルヴァトゥール (conservateur) の資格を得る。ENC は総合的・科学的な教育を行いながら、将来文書館、博物館、そして図書館のコンセルヴァトゥールとなる人材を養成している。この他、数は少ないが、卒業後の 4 つめの進路として、大学におけるコンセルヴァトゥールになる例もある。

改革のもう 1 つの側面は、ENC と各大学との連携の強化である。ただし、職業的な教育ではなく、純粋な科学的・学問的教育の面での協力に限られる。最近、大学院の学生が ENC の授業に参加できるようになり、聴講者の層が広がった。



左から、ベケ氏、ジャペール院長、マルティネズ氏、手前ビュテル延増氏、牧原研究会委員

³ INP の HP (<http://www.inp.fr/>) によれば、INP には ENC 卒業生が進む Conservateur du patrimoine の資格を得るコースと、修復専門家 Restaurateur du patrimoine の資格を得るコースがある。Conservateur du patrimoine は、さらに 6 つの専攻 (考古学、アーカイブズ、目録作成、歴史的建造物、博物館、科学技術・自然遺産) に分かれている。

(2) 生徒数・入学時の競争倍率

1 学年あたり 25 名。合格率は 15% で、かなりの難関である。全国に合計 10 校あるグランゼコールの準備学級で学んだ生徒が受験する。

(3) ENC が養成をめざしている理想のアーキビスト像、現代のアーキビストに必要な素養について

現在 ENC で教えている科目は大学では別々の学科で教育されているものだが、ENC ではこれらを広義な歴史科学としてとらえて教育してきた。これらの科目を教えることについて、我々は非常に強いこだわりと誇りを持っている。授業科目には、歴史学、文献学、ラテン語、美術史、考古学、書物史、コンセルヴァシオンの制度についての科目、アーキビスティック（文書館学）、最近ではメディア関連の現代出版編集史、写真史、オーラル・ヒストリー、イコノグラフィー等がある。

ENC の基本的な教育理念は、できる限り科学的根拠のしっかりした形で、コンセルヴァトゥールが職業的に関わりうる全ての側面の教育をしよう、ということである。歴史家の頭になって資料を管理でき、歴史家が将来研究を行ったり資料を調べたりする際に、何を必要とするかを予測できるように、歴史的ヴィジョンを備えたコンセルヴァトゥールを育てる必要がある。我々はコンセルヴァトゥールに対する基本的概念をしっかりと持ったうえで教育を行っている。その中核をなすのは文化遺産の概念である。どの時代においても、我々は過去の文化遺産を受け取り、また過去から受け継いだ遺産とともに現代の文化を後代に伝え続けなくてはならない。コンセルヴァトゥールは、文化遺産を代々伝えていくという大きな役割のため、最も古い時代のものから現代の資料までの幅広い資料を、文化遺産という同じ観点から扱える素養が必要である。また、これらの資料を管理し、研究に供することのできる能力が必要である。コンセルヴァトゥールは自らの所属している社会の過去を、現代及び将来の世代が、最も有効に活用し理解できるようにする使命がある。

(4) ENC のカリキュラムについて—特に、情報技術の進歩等、ここ 10 年間のアーキビストをめぐる環境変化や、現代の公文書館の現場で求められる実践能力をどう反映させているか。また、カリキュラムは誰がどのようにして策定しているか

前提として 1 つお伝えしたいのは、あくまで ENC では、科学的教育を行っており、職業的教育は行っていない、ということである。ご質問は文書館の職業的現場における変化への対応、ということを指していると思うが、基本的に ENC は現場教育は行わない。例えば、近年の IT の発展について言えば、ENC の教育を行うのに必要な IT ツールや、専門的な研究を行うために必要な IT 技術は取り入れているが、アーキビストが IT を使って業務で何かを行うための教育、というものは行っていない。そ

のような実用的な教育は、卒業後に進学する2つの学校で行う。

ENCで行う情報技術教育の例を挙げると、例えばドキュメントのオンライン化は、調査研究のために必要なので、ENCでも教えている。研究のために収集した文書の一部を書き起こして、データベース化するような技術も、身につけることができる。また、学生は、博士論文を書くための調査研究においては、様々なデータベースを検索する能力が必要であり、電子的な資料も活用している。

カリキュラムを誰が決めているのか、というご質問に対しては、そのような疑問を抱いたことがなかった。現在のカリキュラムは、ENCがその長い歴史から受け継いできた伝統に基づくものである。もちろん、現在も学院内部で検討を重ねて新しい要素を加えている。また、一定の期間ごとに、確認の意味で国民教育省から認可を受けなければならない。

(5) INPで学ぶ専門科目、及びENC・INP卒業後に得られる資格について

INPの文書館専攻で学ぶ専門科目としては、例えば、行政管理学がある。INPの卒業生は、最初の職でも課長級の管理職につく。省庁に派遣され、ミッションールと呼ばれる省庁の文書管理を指導する立場につく者も多くいるので、行政のマネジメント能力を身につける必要がある。また、実地研修などを通して文化行政を学ぶ。文書館専攻でも文書館以外の図書館等の類縁機関で研修を受けて、様々な文化施設について学ぶことになる。そのほか、文書の目録作成、文書処理ツールの実践等の専門科目がある。

ENCを卒業すると、アルシビスト・パレオグラフィ (archiviste paleographe, 古文書学アーキビスト) というディプロマが授与される。しかし、コンセルヴァトゥールの資格が得られるのは、INPとENSSIBの2つの学校のいずれかを卒業した者に限られる。大学等を出た者が選抜試験を受けてINPとENSSIBに入学する方法もあるが、現時点では(将来変わる可能性もある)、INPの文書館専攻に入ることができるのは、ENC卒業生に限られている。

2006年現在、ENCの卒業資格は、大学院修了資格とは無関係の、独立した資格となっている。ただ現実には、ENCでは学生に対して、同時に大学院にも所属するよう強く推奨しており、全員が両方に所属している。これはまもなく制度が変わるので複雑だが、現在は、ENCの学生は大学院で修士号を得た次の年に進む博士課程への準備コース(DEA)に在籍している。フランスでは今、基本的にENCと大学院が歩み寄るような改革が行われているが、今年から、ENCでも大学院修了と同様の学位が出せるようになる。現在、EU諸国共通の学位制度の導入が始まっているが、これは国を越えて学生の交流を円滑にしよう、という流れの中で行われている改革である。この制度の導入により、国内外の大学院から、例えば半年間だけENCに来て勉強す

る、というようなことが可能になる。

(6) ENC の教員の経歴

ENC の教員は大学院の教授と同等の地位を持ち、ほとんどが ENC の出身者である。全員が文書館か図書館等でコンセルヴァトゥールとして働いた経験を持っている。

(7) ENC 及び INP の卒業生の進路

INP の入学定員は毎年変わる。まず文化省と財務省が交渉して、文化省の中でも調整して、毎年定員を決定する。例えば、来年度は 17 人と決まっている⁴。たまたま自分の卒業の年の INP の定員枠が少ないために、ENSSIB に進む、というケースもある。また、若干名は、大学レベルの高等教育の教員資格を得るための、アグレガシオン (agregation) という試験を受けて、研究機関に入り研究者になる者もいる。最近では、少数だがフランス国立行政学院 (Ecole nationale d'administration, ENA) に進み、高級官僚を目指す者、民間の文化財団や文化団体に就職する者もいる。しかし、ほとんどの学生は、INP か ENSSIB に進学してコンセルヴァトゥールの資格を得ることを目指す。INP の卒業生は、大半が国、県・市町村の公文書館に職を得る。

(8) 国立公文書館との関係

国立公文書館と ENC は緊密な関係を持っている。ENC の複数の教員が国立公文書館のコンセルヴァトゥールだった経験があり、ENC の研究リサーチ・プログラムも、しばしば国立公文書館との連携により行われている。また、国立公文書館の現役のコンセルヴァトゥールが、ENC の講師として授業をすることもある。夏の期間中の実習を国立公文書館で行ったり、公文書館の書庫内で ENC の授業をしたりすることもある。

(9) 他の大学院におけるアーキビスト教育との連携について

国内での連携の例はあまりないが、国際的には提携プログラムを幾つか行っている。例えば、モスクワ人文科学大学との提携で、フランス語で授業を行い、アーキビストを養成するコースを開講している。また、レバノンのベイルートにある唯一の公立大学院に、アーキビストの修士号を得られる新しいコースを作ることについても、協定を結んでいる。しかし、そのような例は多くはない。というのも、少なくともヨーロッ

⁴ DAF で聞いた話では、学生は INP 卒業後、国によって国・地方の公文書館及び関係機関に配属されるシステムになっているので、将来の国・地方の公文書館専門職の需要予測に従って、定員調整を行っている、とのことである。

パにおいては、国によってアーキビスト養成の方法が異なっており、ENCが行っているような教育は、他の国では主に大学・大学院で行われている、というような状況の違いがある。

(10) 20～30年前のENCの学生と、今の学生との違いについて

今の学生のほうがレベルが高いと思う。要求されるものがどんどん高くなっている。最近のIT技術にはなじまない、という学生も一部おり、文科系の伝統的なアーキビストの仕事のイメージを持って入学してきて、近年ENCが導入した情報技術の授業に不満を抱いている者もいる。しかし、より一般的には、昔よりむしろ優秀な学生が、最先端のITを取り入れながら学んでいる。

INPが設立される前は、アーキビストのための高等教育は、ENCにおける純粋に学問的な教育のみだった。当時は、少数派ではあったが、もっと実用的な、現代的な教育をしてほしい、という要望もあった。ENCが行っている教育は他の教育機関では得がたい、とても質の高いものである。ENCの教育があつてこそ、文書を見たときにその文書の中身を理解し、文書の背景を把握することができる。ラテン語のものを現代語に訳すこともできるし、その文書がどういう経緯を経てきたのかも説明できる。このような教育は、ENCでしか受けられないものである。現在、大学院でアーカイブズ学の修士号を出しているところも複数あるが、それらは職業的な、現代文書を対象としたものに限定されている。

(11) ENCの科学的教育が受け継がれてきた背景

ENCの教育は、フランスの19世紀型の中央集権体制に基づいている。20世紀に入って地方の体制が整備されたとはいうものの、フランスは、基本的には中央集権の強い国家として発展してきた。行政機構も、教育も、そのような歴史が反映されている。そういう点で、フランスは特殊な例といえるかもしれない。フランスのアーキビスト教育体系は、国の行政体系、中央集権的な強い指導力を持つ公文書館制度を反映したものとなっている。フランス革命以降、市民が公文書にアクセスできるようになった、ということには大きな意味がある。革命以前は、国王や教会などの権力者のみが文書にアクセスでき、市民は文書を見ることができなかった。EUでは、先ごろ加盟国におけるアーカイブズの保存管理調査を行った。その報告をみてもわかるが、国によって状況は様々である。欧州においても、革命を経験しなかった国では、例えば教会文書は教会が管理していて一般市民のアクセスは難しい、というような状況が今でも見られる。フランスの場合は、革命によって過去の歴史が国有化された、といえると思う。

3. まとめ

今回の調査により確認できた、ENCにおける教育は下記のようにまとめられる。

- ・ENCでは、将来文書館、博物館、図書館等に勤務する、文化遺産を扱う専門職になる人材の養成を行っている。
- ・ENCはフランス独自の高等教育機関、グランゼコールの1つで、難関を突破して入学してからは、国から給与の支給を受けながら学ぶことができる。
- ・教育期間は3年半で、実務教育は行わず、純粋に科学的・学問的な教育を行う。
- ・ENC卒業生はアルシヴィスト・パレオグラフィの資格を得る。卒業後ほとんどの学生は、さらに上の高等教育機関であるINPまたはENSSIBに進学し、1年半の実務教育を受けた後、最も上級のコンセルヴァトゥールの資格を得る。
- ・ENCの学生は、同時に大学院にも所属し、研究を行う。
- ・ENCからINPに進学した文書館専攻の学生は、卒業後そのほとんどが、国や地方の公文書館や政府機関の管理職のポストに配属される。

個人的な感想になり申し訳ないが、面談を終えて、日本の現状とのあまりの差に言葉もなかった。現実には様々な問題を抱えているのかもしれないが、フランスでは自国の文化遺産を後代に伝え続けるため、国家が責任を持ってその担い手を養成している、という事実に感服する。しかもその担い手は、実用的な技術や経験以前に、まず最高レベルの幅広い学術的な知識基盤を持つべきである、という信念から、ENCでは実務的な教育は行わない、という姿勢が現在に至るまで貫かれているのである。何をしても、それが何の役に立つのかを数値等で示さなければならず、人員削減や業務効率化ばかりが求められる今の日本では、考えられないことである。文書館、博物館、図書館の専門職を、文化遺産に関わる専門職=コンセルヴァトゥールとしてとらえ、共通の教育を行っている点も注目される。

フランスにおいて、このようなENCの教育が継続できるのは、中央集権の強い公文書館制度と、文化遺産を重んじる国民性に裏付けられているからである。日本の公文書館専門職員の資質及び地位の向上のためには、公文書館制度の充実強化と、文化遺産を後代に伝えることに対する社会全体の強い意志、という2つの支柱が不可欠であろう。